「稲むらの火」発祥地和歌山で

「世界津波の日」2018高校生サミットｉｎ 和歌山

「稲むらの火」をイメージしたオレンジ色のペンライトを参加者全員で掲げた

総会・閉会式

プログラムの最後に総会・閉会式が行われた。オープニングのアトラクション、主催者と来賓あいさつ、分科会報告、大会宣言発表で、宣言では「自然災害から人命を守るために、サミットで学んだことを行動に移す」とする内容を採択した。

■　■

和歌山県立橋本高校の琴、同県立紀北農芸高校の太鼓の演奏に続き、主催者3人があいさつを行った。

二階俊博・自民党幹事長

今年も世界各地で災害が発生した。わが国でも大阪北部地震、西日本豪雨、北海道胆振東部地震等が発生し、現在も避難生活を余儀なくされている人が多い。

稲むらの火の聖地、和歌山で、災害から1人でも多くの命を守るのだという決意のもと、勉強したこの期間は大変尊いものだ。

若き津波防災大使。皆さんのことをこう呼びたい。

サミットで学んだことを多くの友人に伝え、今後、津波の被害者が1人でも少なくなるよう、努力をしようではありませんか。

西岡利記・和歌山県広川町長

世界から集まった高校生が地震と津波災害から人々の命を守るため、ここ和歌山県に集まり、議論することは非常に意義深い。

今回のスタディーツアーで普段の避難訓練の大切さを認識しただろう。訓練は繰り返し行うことが重要だ。皆さんの国でも実施するよう呼び掛けてほしい。

水鳥真美・防災担当国連事務次長補兼事務総長特別代表

どんな国でも自然災害の攻撃を受ける。しかし、予防することができる。防災、減災を優先順位の第一にしてほしい。

皆さんは気候変動の道筋を変えられる。若い人のアイデアで変えることができる。できなければ地球は皆さんの世代で終わってしまう。変革を起こしてほしい。

■　■

安倍晋三首相、自民党総裁からは次のようなビデオメッセージが寄せられた。

私たちは2万人の犠牲者をもたらした震災から多くのことを学んだ。防災教育は極めて重要だ。この経験を世界に広め、分かち合うことはわが国の使命だ。

次世代を担う若者が集うこのサミットは貴重な機会だ。3回目の今回、過去最多の国の参加で盛大に開催されることは非常に喜ばしい。

村のリーダーだった濱口梧陵は稲むらに火を付け、村民に避難を呼び掛け、多くの命を救った。皆さんは梧陵の精神を受け継ぎ、将来の防災のリーダーとして、世界中で活躍してほしい。わが国は国土強靭化の緊急対策を施し、皆さんとともに強靭な国づくりをして未来を切り開いていく。

■　■

来賓からは次の3氏があいさつした。

山本順三・国土強靭化担当大臣（代理＝中根一幸・内閣府副大臣）

今回の視察や交流を通し、防災に関する日本の知見や経験を学んだことと思う。平時から防災意識を持つことが重要だ。サミットで学んだことをベースに防災の重要性を広めてほしい。

石井啓一・国土交通大臣（代理＝工藤彰三・国土交通大臣政務官）

濱口梧陵の故事にはわれわれが学ぶべきことがたくさんある。今回のサミットで学んだことが各地で生かされ、防災社会が世界に浸透することを祈念する。

浮島智子・文部科学副大臣

広川町の防災遺産は今年、67件目の日本遺産に認定されたが、防災遺産としては初めてだ。これらの遺産や意見交換を通して勉強したことを地域に伝え、「心を一つに、守れる命はしっかり守る」を合言葉に、世界中で活躍してほしい。

■　■

世界から集まった高校生は2日間にわたり、三つのテーマに分かれて分科会を行った。その討議内容を12のグループごとに発表した。討議のテーマは「災害について知識を得る」「災害に備え意識を高める」「災害から生き抜く」。主な内容は次の通り。

災害について知識を得る

知識がないことで多くの被害が起きる。一般の人々は防災の情報に触れる機会が少ない。政府の教育も少ない。国の間で防災情報の共有が必要だ。信頼できるウェブサイトを作り、情報提供することも必要だ。

災害に備え意識を高める

若い人の防災意識が低い。若者の興味を引くやり方で高めていく必要がある。私たちが幼稚園にボランティアに行き、防災に関するゲームをしたり、ティーンエージャー向けにはビデオを作り、SNSで流したりするのもいいだろう。

災害から生き抜く

災害後も正確な情報をしっかり伝えることだ。高校生は大きな影響力はないが、情報を広めることはできる。SNSを利用して、正確な情報を拡散することだ。日頃から避難所、避難ルートを明確にしておく必要もある。

■　■

エンディングでは会場の一人一人が稲むらの火をイメージしたオレンジ色のペンライトを持ち、サミットの議長を務めた高校生2人が大会宣言を発表した。

宣言文の要旨は次の通り。

世界各地の人々の災害リスク軽減意識をさらに高めるために、若手世代が濱口梧陵をはじめとする偉大な先人たちから学んだ精神に基づいた行動を将来にわたり遂行するとともに、各国の自然災害から人々の命を守るために、サミットを通じて学んだことを行動に移すべきだ。

偉大な先人に学び 災害リスクを軽減

大会宣言

安倍首相がビデオでメッセージ

あいさつする二階氏

分科会の討議内容を発表する高校生

大会宣言書を掲げる高校生議長

津波防災講演会

東京大学大学院情報学環 片田特任教授

「避難3原則」守れ

災害時は率先して逃げる

東京大学大学院情報学環の片田敏孝特任教授が津波防災に関する講演を行った。

片田氏は災害への危機管理対応、災害情報伝達、防災教育、避難誘導のあり方について研究を行うほか、地域での防災活動を全国各地で展開している。

特に岩手県釜石市で東日本大震災発災前から児童・生徒を中心とした防災教育に取り組み、地域への防災文化の定着を図っている。

要旨は次の通り。

2015年の国連総会で11月5日が世界津波の日に制定された。なぜこの日か。今から200年近く前の1854年11月5日、安政南海地震でこの和歌山県が津波の被害を受けた。その時、地域のリーダーだった濱口梧陵が積み上げられた稲の束に火を付け、村人たちを高台に避難させた。この濱口の行いにより、多くの命が救われた。

この話はそれにとどまらず、濱口は村に義援金を送ったり、仕事をつくったり、堤防を造ったりすると、村人たちに生きる希望を与えた。私財を投げうって造った高さ5㍍、長さ600㍍の堤防は、92年後、この村を再び津波が襲った時に村民たちの命を守った。

この濱口の行いを世界に広めようと、11月5日を世界津波の日に制定した。

今から7年半前、日本は東日本大震災に見舞われた。東北各所で起きた津波や地震により亡くなった人や行方不明者は2万人以上に及ぶ。

私は防災の研究者だ。過去の津波被害の知識はあったが、これだけの被害が起きるとは想定していなかった。

津波は何もかも破壊する。津波が去った後の町は悲惨な状況だ。東日本大震災で岩手県釜石市の鵜住居（うのすまい）地区は高さ16㍍の津波が襲った。16㍍の津波とは、普段見ている海の海面が16㍍上がることだ。それが容赦なく襲ってくる。釜石市では千人を超す人が亡くなり、この地区だけで600人を超える人が亡くなった。

当時、釜石の中学生たちは授業が終わり、それぞれクラブ活動に励んでいた。その時地震が起きた。揺れが3分も4分も続き、「これは絶対大きな津波が来る」と、隣の小学校に行き、大きな声を掛け、子ども同士が手を取り合って1・7㌔の道のりを避難した。この子どもたちの行動は「釜石ミラクル」として世界に報道された。

避難の3原則がある。まず、「想定にとらわれるな」。ハザードマップを信じてはいけない。ハザードマップから外れていれば本当に津波が来ないのか。ハザードマップはシミュレーションの結果の一つに過ぎない。

「過去の津波はここまでだからここは大丈夫」といい勝手に思うことは危険だ。

二つ目は「最善を尽くせ」。最善とは、これ以上何もできないこと。できる限りのことをやり遂げることだ。これまで被害に遭った人は本当に最善を尽くしたか。「ハザードマップの外にいるから大丈夫」とか、「アラートが鳴っていないから大丈夫」とか、思っていなかったか。「この程度の対応でいい」と思うのはやめてほしい。

三つ目は「率先避難者たれ」。一番最初に逃げる人であれ。格好悪いとか、卑怯者とか、思うかもしれない。しかし考えてほしい。父親や母親は何か起きた時、真っ先に愛する子どもの所に行くだろう。しかし、そこで被害に遭うかもしれない。でも、子どもが避難していると信じていれば、そんな被害に遭うことはない。

釜石には34の津波の到達点の碑がある。ここより下に家を建てるなと書いてある。家族や家をなくした人が、こんな思いは自分だけでいい、後世に同じ思いをさせたくないと、心から願ったものだ。

「津波てんでんこ」という言葉がある。津波が起きたら家族のことさえ気にせず、てんでんばらばらにすぐに避難しなさいという意味だ。

薄情な言葉に聞こえるが、実は違う。災害で共通するのは、大事な人のことを思って命を落とすことだ。一人一人がしっかりと避難できる。そんな信頼関係があれば皆が命を落とすことはない。

「てんでんこ」できる家族にならねばならない。

記者会見

全てのプログラムが終了後、主催者ら4人が記者会見を行った。出席したのは和歌山県の仁坂吉伸知事、同県広川町の西岡利記町長、サミットの「高校生議長」を務めた中井充歩さんと伊森安美さん。

仁坂知事は「高校生のプレゼンテーションは見事なものだった。中井さんと伊森さんの最後の宣言には涙が出た」、西岡町長は「プレゼンテーションで情報発信が大切と言われた。行政としてしっかり取り組まなければと思った」と、サミットの感想を述べた。

中井さんと伊森さんは「3回目の参加で、自分にとっての集大成としてがんばった」（中井さん）、「英語の発音やアクセントが難しく、練習したり、教えてもらったりと大変だった」（伊森さん）と、それぞれ大役を務めた感想を述べた。

将来について2人は「英語と防災、両方の知識を生かした仕事をしたい。まずは英語の大学に行き、インターンシップにも挑戦したい」（中井さん）、「まだ英語が未熟。もっと勉強して、会話の力を高めたい。将来は国際交流に携わる仕事に就きたい」と、それぞれ夢を語った。

会見する（左から）西岡町長、伊森さん、中井さん、伊坂知事

「集大成」「英語大変だった」

高校生議長が大役終えて感想

フォトセッション